

## 【ATC フィロソフィー③】

こんにちは、アークテックコム株式会社で、技術書類の作成と翻訳を行っています豊原 信です。

Tel : 050-6864-6201  
Fax : 050-6864-6202  
E-mail : [m.toyohara@arcteccom.jp](mailto:m.toyohara@arcteccom.jp)

### フェアプレイには残心が必須

今月は引続き弊社のフィロソフィー（考え方）と応援メッセージの紹介です。

\*\*\*\*\*

#### フェアプレイの考えで判断する

相手の為になることは何かを考える時に、拠り所とするのは「公平」「公正」「誠実」「正義」「勇気」「博愛」「勤勉」「謙虚」です。したがって、儲けるためには何をしてもよいとか、少しくらいのルール違反や数字のごまかしは許されると考えるのは間違いです。

スポーツの世界でも、反則やルール違反のないゲームからさわやかな感動を受けるのは、フェアプレイ精神に基づいているからです。誰であっても、矛盾や不正に気づいたら正々堂々と指摘をすべきです。

私たちの職場が常にさわやかで活気にあふれたものであ

るためには、従業員1人1人が、フェアなプレイヤーであるとともに、経済活動は価値とお金を創造する活動であり、他人の資産を奪い取るものでないことを認識すると同時に、厳しい審判の目を持つことが必要です。

「ATC フィロソフィー」とは、「利他の心で、本当に相手のために成ることは何なのか」ということを突き詰めていったものです。つまり、「利他の心で、人間として正しいことを正しく遂行する」ということを根本にした精神なのです。この「ATC フィロソフィー」の中に「フェアプレイの考えで判断する」という項目があるわけですが、「ATC フィロソフィー」自体がフェアプレイ精神を貫くということできています。ここで言う「フェアプレイ」とは、「公正」という意味です。つまり、「公正さを尊ぶ」ということ、「正しいことを正しく貫く」ということを企業の規律の中心に置くべきです。

不正なことは、一切してはならない。これはトップの社長から従業員まで、全員が徹底しなければならないことなのです。

大事なことは、この「フェアプレイ精神」を社内に深く定着させるということです。「正々堂々と正しいことを貫こう」と言われたときは、「そのとおりだ」とみんな思いますが、少し時間がたてば、だんだんその気持ちも薄らいでくるものです。そして、ちょっと儲け話などを持ち込まれると「まあ、少しくらいは」と心がふらついてしまうわけです。

確りと、経済活動の原則を理解して、正々堂々と正しいことを貫くようにしましょう。

ここで一点注意していただきたいことがあります。人として正しいことは、自分達が生きる風土や時代や文化、宗教や哲学の影響を受けるということです。風土や時代や文化が異なれば正しい内容が異なるということです。この縛りを超える為に、利

他の心が必要になります。

## 建設的な提言ができる社風 をつくる

会社というのは人間の集合体です。その中で皆が正しい判断ができるような気風を作ることが必要です。

例えば、弊社ではお客様が、満足され、感動し喜ばれることを目標にしています。それによって、私達も喜びを共有し幸せに成ることを目指しています。ですから、社内においては、業務を依頼された従業員、更に次工程の従業員も、自分達にとってはお客様になります。その為、全員が相手のことを思いやり、相手の為になるように考え判断することが大切です。

皆が幸せに成るための建設的な考えがあれば、どんなに末端の人が言おうとその意見は歓迎して、上司もそれを聞く耳を持ち、全員で取り組むような雰囲気、ぜひ会社の中につくっていきましょう。

## 大胆さと細心さを使い分ける

人として正しい判断を行うために必要な考え方に、大胆さと細心さという相矛盾するものがあります。この両極端を併せ持つことによって初め

て完全な仕事ができます。

この両極端を併せ持つということは、「中庸」をいうのではありません。ちょうど綾ちゅうようを織りなしている糸のような状態を言います。縦糸が大胆さなら横糸は細心さというように、相反するものが交互に出てきます。大胆さによって仕事をダイナミックに進めることができると同時に、細心さによって失敗を防ぐことができるのです。

常に正しい判断を行えるように、仕事を通じていろいろな場面で心がけることによって、この両極端で考える力を兼ね備えることができるようになるのです。

日々自己の人生に対する責務を果たす時、ときには大胆に決断しなければなりませんし、または石橋をたたいても渡らないというくらい、細心かつしょうしん小心よくよく翼翼として判断しなければならないときもあります。つまり、責務に応じて「大胆さと細心さを使い分ける」ことが必要になるわけです。「大胆さ」と「細心さ」を綾織りのように織りなしていかなければならないのです。

この「両極端」とは、ものすごく情が深く、優しい人間性を持っていながら、ときにはズバツと従業員の首を切れるという

冷酷さ、非情さということです。あるいは、たいへんな理論家で、合理主義一点張りに見えて、一方では人間的、感情的な一面も持っているということもあるでしょう。つまり、大胆さと細心さ、温情と冷酷、合理性と人間性、それぞれ両極端の考え方を、1人の人間の中に綾を織りなすように使い分ける能力がなければなりません。

このことは、経営者でも政治家でも、素晴らしい仕事を成し遂げた人の伝記などを読むと、矛盾した考え方を持っていた人が多いことがわかります。

例えば、日頃は非常に優しい、部下思いであったのが、あるとき「泣いて馬鹿を斬る」ことを行う。そのくらいの失敗で部下を首にしなくてもいいではないかと思う考えと、いや、小さなことかもしれないが、これをこのまま放っておいたのでは組織全体が死んでしまうと断罪する非情な考えです。これは自己の責務を果たす為の正しい判断をする工程でしかありません。

※2025年11月号に続きます。

\*\*\*\*\*

今月の応援メッセージ

### 残心と驕り

得意感を心が感得した際は、たいていの人たちがまちに有頂天になって、その結果として心の備えを緩めがちです。皆様にご存じの Intel Inside のブランドで 1995 年から 30 年間、飛ぶ鳥を落とす勢いで世界の PC 市場を握っていた Intel が大赤字の状態です。USA 政府の支援を受けています。

人の体と同じように企業も心の備えを緩めると、それが誘因となって、軽視することのできない破綻を引き起こすことが、事実としてすこぶる多いと言えます。

このことをもっとハッキリ理解するのに、武道でいう「残心」ということを考察してみます。

「残心」とは、戦い終えた時の心構えということの意味です。すなわち、戦い終わったときも闘う最中と同様に、かりそめにも安易に心を緩めてはいけないということなのです。

特に勝利を勝ち得たときは、この心構えを厳重にすべしと戒めています。なぜならば、誰でも勝利を得ると、勝った！という得意感、安心感が即座に心に生ずるものです。すると同時に

心の備えに緩みが生じて、武道家の最も怖れる隙というものが付随して生じるからです。

この隙というのは、心理学的にいうと、「放心から生じる有意注意力の欠如」という心理現象なのです。この心理現象が精神生命の内容に発生すると、心の持つ応変可能な自在性という機能が委縮されます。これはとどのつまり精神生命内に内在する一種の報酬作用なので、そうになると、心の働きが萎縮的になって、さらに心身相関の結果として、自然と肉体の活動も消極的な束縛を受けることに成りません。

結果、Intel は市場の動向や要望を掴み切れずに、NVIDIA や TSMC に大きく差を付けられています。ところで今後の PC は、AI PC に置き換わっていくのでしょうかね。

豊原 信